

六 花 6



俳句雑誌りっか
2017 (平成29年)
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

麦秋忌

かん
間

てふてふに心のすきを飛ばれけり

幹撫でて人は桜になつきけか

住職の手より大山蓮華かな

カーネーションの如くに土耳其桔梗来る

初蝶の郵便受けに待つてをり

一輪の匂にほひ卯木うつきぎの開き初む

光陰や嗚呼播州の麦の秋

ぼんやりと夕に入りけり麦の秋

虚空よりくづれてきたる麦の秋

蓮の実の甘納豆に芒種ぼうしゆかな

麦秋の印いんなみ南平野夕ぐもり

文鳥35回忌

ヤス子土産

麦秋や印いな南平野の大夕日

仰ぎやうぎやうし仰子しばらく鳴いてをりゐたり

天蓋がいのミモザの豆は揺れて吉

田搔機の音の中なる鐘をつく

どくだみの角隠しなる鬼瓦

紫り丁香ら冷えとうなづき合うて巡めぐりけり

塀に沿ひ風薫りくる別院へ

薫風にけふは混じりのなかりけり

虚空へと列なしゐたる松の芯

噛むといふ言葉痛かり赤蜈蚣むかで

アベリアのいくたび虻をはねかへす

月輪山円照寺8句

春光の渦にくづる大鳴門
包丁のたちまちくもり桜鯛
春の鯉水を濁して現れにけり
雛舟の波に間合を取りゐたる
根分けせし菖蒲に風のほしいまま
海女小屋を少しはなれて三月菜
庭石をはづみてみせし雀の子
突きやれど子に届かざる紙風船
連翹の空にはねたる一枝かな
沈丁の香にのぼりゆく離宮道

雪卿集

青き踏む

佐津のぼる

冴返る夜は鳥籠を布圍ひ
野放しのままに燃え尽く畦火かな
青き踏むべじーカーより降されて
抱卵の紅のほんのり干鰯
人に馴れ庭に馴れたる雀の子

芽木明り

升田ヤス子

芽木明りたたきて鷺の発ちにけり
焼け山の縞目くつきりととのぐもり
古畳踏めば女雛のつと背く
けふはまだましね春めく日の言葉
印泥にかぶせる晒し雪もよひ

雪卿集

寒 星
志方 章子

故郷に露の臺摘む父母はなし
花生けや細口なれば梅一枝
寒星の瞬き宇宙青かりき
寒星の寄り固まれる梢かな
若草に地図を広げて旅を練る

涅槃西風
藤生不二男

蛸壺の乾ききつたる涅槃西風
薄氷水車の音の軋みをり
水温むたちまち曇る刃かな
雲間より日の差しきたり桜貝
くもりたる眼鏡を拭ふ春野かな

雪卿集

黄水仙

出口

誠

ゆるやかな流れの岸に黄水仙
菜の花の倒されてなほ上を向く
春分の流れに岩のぶつかりぬ
春うらら緑の長ぐつ歩み寄る
倒れても生きてる木々よ春分日

寒もどり

永田万年青

寄せ鍋やくもる眼鏡の箸さばき
仰ぎ見し六十段の雛人形
隠沼の動くものなし寒もどり
囀りや鳶のゆつくり旋回す
手帳の字判読できず山笑ふ

作業着のパン屑貫ふ残り鴨

赤松有馬守破天龍正義

さぎょうぎのばんくずもらうのこりがも あかまつありまのかみはてんりゅうまさよ

啓蟄や万年床をはたきぬて

作業着のパン屑貫ふ残り鴨

水草生ひ水を明るくしてをりぬ

鶉もゐるし鶇もゐるし麗らかぞ

飯蛸や赤石の浦の棚曇

互いに境遇の似たもの同士というしみじみとした作品。工揚か近くの現場で働く作業員が昼休みに、池にやってきて、パン屑を残し鴨（北国へ帰れなかった鴨）にやりながら心が通い自らも憩う。作業服を着たの人柄までにじむ句になった。実は、この句の中心（主人公）は残り鴨であるはずなのに、作業着の人物の方に強く惹かれるのである。パン屑は家から持ってきたのか、昼食のパンの残りか、などあれこれ想像も広がる。赤松がこういう何のてらいもないしみじみとした句を詠めるようになったのは足が地に着いてきた証左。六甲

雪樹集

水草生ふ

赤松有馬守破天龍正義

啓蟄や万年床をはたきぬて
作業着のパン屑貫ふ残り鴨
水草生ひ水を明るくしてをりぬ
鶉もゐるし鷗もゐるし麗らかぞ
飯蛸や赤石の浦の棚曇り

風光る

谷口一献

帰るとこある幸せや鳥曇
梅の紅深うなりたる棚曇
千の風光りて海に届きけり
啓蟄やまたこの季節がやつてきた
のどけくてつい晩酌を忘れけり

雪樹集

春の午後

溝渕 弘志

春の風動き止まらぬ池の鯉
窓開けて飲むミルクティー春の午後
山笑ふ山が大きくなりにけり
白木蓮鳥のかたちに似てをりぬ
鮎子煮食べごろなのに届かざる

春障子

住田千代子

水仙を活けて菊炭沈ませり
春三番雨戸叩いて去りにけり
曇る日はくもりの色の春障子
野遊びの敷物風に煽らるる
沈丁花襲脱ぎつつ匂ひけり

雪樹集

柳の芽

田尻 勝子

柳の芽煙れる中に鳥の影
春ぐもり切らるべき樹の赤テープ
姿見のくもりを磨き春隣
芽吹きたる山の吐息の漂へる
ビツグデータの点の一つや花の下

春 耕

延川五十昭

春耕やおぼろ昆布の握り飯
亀の井の水は春日を返しけり
てのひらに乗せて色増す落椿
走りゆく若人ふみし春落葉
ついでばみて花揺らしある雨の庭

雪樹集

春の虹

廣畑 育子

麗らかや伊勢の名物生姜糖
初虹の大きく架かる夫婦岩
春の虹浦に巻く風くもりある
川浚ひ盛らるる土砂に湯気のあり
臘梅に鳥の和毛の揺れてをり



蛭雪譚

六甲選

二十九年六月号鑑賞と随想

春の風動き止まらぬ池の鯉 溝瀆 弘志

春風が吹いて、池の中では活発に動く鯉が見えるよ、と詠んだ、というのが作者の眼目で、冬の間じつと寒さに耐えていた鯉にまで想像が及ぶ。その鯉に春がやってきて、日一日と動きが活発になつてくる鯉に目をとめた。鯉は活発になりすぎて動きを制御できないほど春を飲んでいっているのである。その鯉を食べてはならぬ、と綱吉公のおふれが出ている。

水仙を活けて菊炭沈ませり 住田千代子

菊炭は切り口の菊の模様が美しく茶の湯に使われる。産地を百科事典で調べて見たら「クヌギを原木とした主な産地としては、岩手県一関市、藤沢町、栃木県市貝町、那須烏山市、愛媛県大洲市、内子町など」とあった。実家では茶の湯でなく家庭用として使っていたように思う。親戚の人が、焼いた菊炭の俵を荷車に積んできて、母に「今年もお宅の山のクヌギを伐らしておくんはないや」と言っていたのを覚えている。炭は湯を沸かすだけでなく、消臭や防湿、匂のように水に沈めて趣を副えたり、鮮度を保つこともする。母はその菊炭を火鉢や生活用に七輪で使い、余ったものを匂のように生け花や風蘭を巻き付けて厨の窓に吊り、初夏、香りのいい花を楽しんでいた。菊炭を普段着のように使う贅沢な時代であった。

六花集



水無月到着願

江見 巖

室の津の女祭や小五月祭
笹舟と同じ歩巾の青き踏む
モンローの愛する男葱坊主
山吹や杖借りて行く山の寺
婆の取る土筆の袴嫁いびり

小林はじめ

春来るやそこはかとなく天和む
土くれの名残止めて露の臺
乙女子ら加太淡島に針まつり
春の水飛沫を恵み猫柳
嫁ぎ行く姉と名残の春の川

平居 滯子

青春へ立ち帰る父母卒業歌
コンサート手話の指先風光る
カルテット金の腑フルート春開く
やや君に近づく六階春の星
春秋や満艦飾の鉢並べ